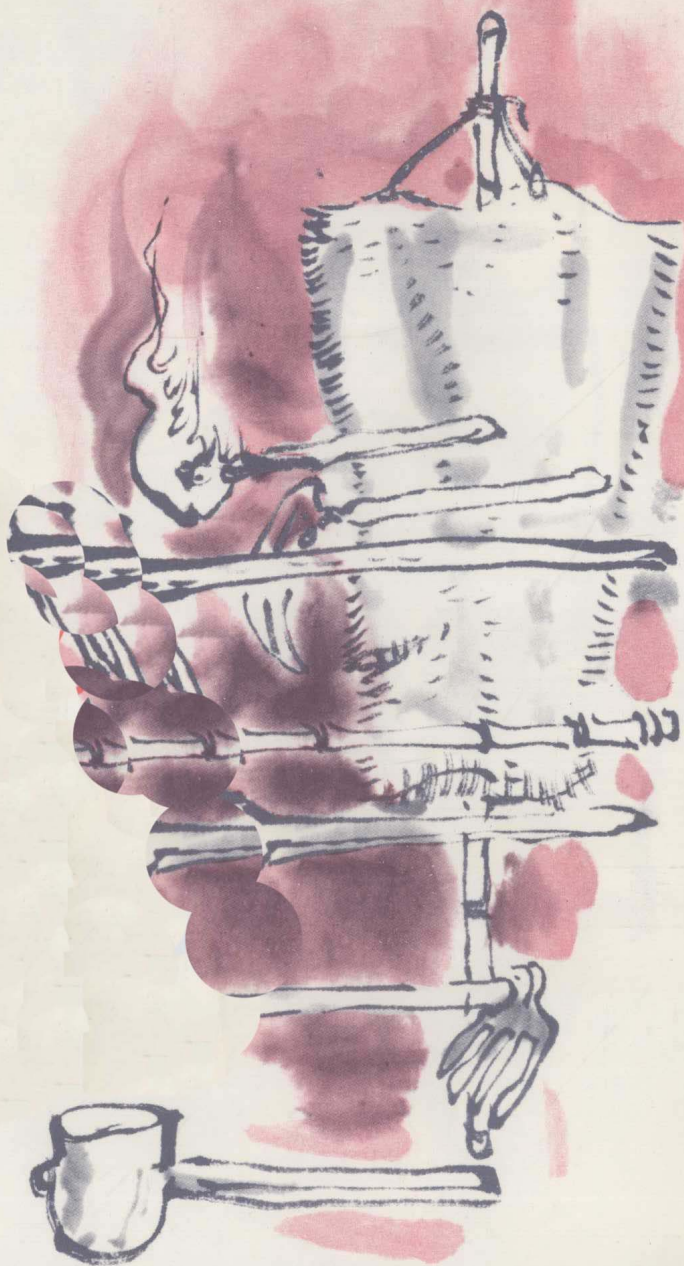


ぶんせい だんご
文政 丹後 ばなし

来栖良夫



来栖良夫
ぶんせい
文政丹後ばなし





少年少女／創作文学

文 政 丹 後 ば な し

N. D. C. 913 偕成社 266p. 21cm 1974年

1973年 第1刷

1974年 第2刷

著 者	くる	す	よし	お
	来	栖	良	夫
発行者	今	村		広

発行所 株式会社 偕 成 社

東京都新宿区市ヶ谷砂土原町3の5

TEL (03) 260-3221 (代) 〒162

振替 東京1352番

本文印刷 新興印刷製本株式会社

多色印刷 小宮山印刷株式会社

製 本 文勇堂製本工業株式会社

落丁本・乱丁本はおとりかえいたします。

8393-719250-0904 5

©来栖良夫 1973

はしがき

いまから百五十年ほどまえの、文政五年十二月十三日午後十時ごろ、加久屋橋のたもとで、いきなり火がもえあがりました。

ふしぎな火は三方からおこって、冬の夜空をまっかにそめ、それを合図に百二十か村の百姓たちが、いっせいに立ちあがりました。

これは丹後の国の百姓と武士のたたかいの物語です。丹後は、いまの京都府の西北部です。

なぜこんなさわぎがおこったのでしょうか。

そして、事件はどうなったのでしょうか。



文政丹後ばなし／もくじ

第一章 富津七万石

一、夏の丹後路

二、ひろい世間

三、奥山ぐらし

四、江戸の夕立

五、一揆のくわだて

六、うずまき

七、月夜とやみ機

第二章 みの笠きせ

一、十三夜ののろし

二、百二十か村総ぶれ

101 90 77 62 47 37 26 16 6



三、注進ちゆうしん

四、切戸の渡しきりどわた

五、やぶられた守り口まもぐち

六、大津屋ぜめおおつや

七、城下のかけひきじょうか

八、魚屋町の六か条うおやまち

九、ふりだした雪

第三章 総ぶれのあとそう

一、春風と密偵はるかぜ みつてい

二、新兵衛兄弟とらわれしんべ えきやうだい

三、にげだす筑前主従ちくぜんしゆじゆう

四、犬の堂口の刑場いぬ どうぐち

五、栗原百助平やぶりくりはらのやくすけあう

六、海のみえる峠とうげ

作者と作品について『菅忠道かん ただみち』



著者・^{くるすよし}来栖良夫

1916年、茨城県に生まれる。出版社に勤めたのち、文筆生活に入る。主な著書に『くろ助』（日本児童文学者協会賞受賞作）『江戸のおもちゃ屋』『おばけ雲』『村いちばんのさくらの木』『戦争と人間のいのち』などがある。現在、日本児童文学者協会会員、日本子どもを守る会会員。現住所／東京都保谷市泉町5-6-25

画家・^{たけべもといちろう}武部本一郎

1914年、大阪に生まれる。戦後上京し、絵本、児童書を中心に幅広く活動する。けんらんで、繊細な画風をもって知られ、最近の作には『小さい心の旅』『かわいそうなゾウ』『花ははるかに』などがある。出版美術家協会会員。現住所／神奈川県横須賀市追浜南町 3-3-371, F64

第一章
宮^{みや}津^づ
七
万
石^ご



一、夏の丹後路



はやいもので、人さらいの手ではこぼれるようにして、丹後（京都府西北部）の奥山をでてから一年たつ。ことし十一の弁吉も、旅じたくになると、背たけがぐつとのびてみえた。

文政五年（一八二三年）、夏の夜の明けぎわに、ひどく身のこなしのはやい男にせきたてられながら、弁吉は、奉公さきの摂州川辺郡（大阪府北部）田中村の勘兵衛やしきをでた。

足のわらじはたちまち草つゆでぬれ、しりっぱしよりの単衣のすそにはへぬすびとはぎの種がからみついた。さきにたった男は、はんぶんねむったような顔をしていて、ふりむきもしないが、それでもときどき、きらりとほそい目をひからせた。

淀川べりから船にのり、伏見へでて、それから京の町へはいると、弁吉の見はりは、小ぶりの、あから顔の男といれかわった。

「よろしゅうおます。こいつのことは、わしがたしかにひきうけましたよって、旦那はんは、よろしゅうおつたえしとくんははれ。なに、宮津のかえりには、こんな、もっさいやつとちごうて、ま

めにうごく、いきのええ若衆を、ぎょうさんひつかついできますよって。」

飛脚の佐十は、摂州からつきそってきた男に、ていねいに腰をかがめ、それから、弁吉の顔をのぞきこむようにして、声をはりあげた。

「おまえにいうとくけどな。子どもでも年期奉公にでようちゅうぐらいのもんなら、ようわかつとるやろけど、うぬは年期があけて親もとへもどるのとはわけがちがうんや。とちゅうでへんな氣をおこしたらあかんで。おまえの年期の書き付けは、このとおり、わしがおあずかりしとる。こんどのことの決着がつくまでは、われのからだは、われのもんでも、奥山のわれの親のもんでもない。勘兵衛の旦那はんのものやということ、を、わすれたらあかん。なんかことがあつたら、われの親の難儀がかさむばかりや。いうとくけど、わしは丹後の峰山生まれやさけ、丹後一円なら、どんな山のなかのイノシシ道でも目をつむっとってかけまわれる男や。にげかくれたかて、むだな骨おちちゅうもんやで。」

丹後の宮津と京のあいだをゆききして、生糸やへちりめんをうごかす輸送業者の佐十は、どうやら弁吉よりも、勘兵衛やしきのおくり男にきかせたかったらしい。

ふたりは、まず京の北西、丹波福知山へむかつていそいだ。このあいだは二十二里（一里は、やく四キロメートル）、二日の道のりで、旅人は、たいていとちゅう、檜山あたりで宿をとる。福知山は、朽木藩三万二千石の城下町で、ぐるりを山にかこまれていた。

丹後の宮津へは、ここからさらに北へ八里、夜明けまえに福知山をたてば、夕がたには宮津城下

へはいることができた。この街道のいちばんの難所は、大江山の峰つづきの普甲峠で、宮津藩主が、大名行列をつくって江戸へむかったり、お城へもどったりするときもここをこえる。ふもとの中の茶屋には、宮津藩の茶店まであって、往來する人や馬がここでひとやすみするから、えんりよのないお国なまりが大きく耳にひびいた。

普甲峠は、まがりくねったけわしい山道である。いちめんみどり葉のもりあがった山が、左右から、あたまの上へおおいかぶさってくる。日ざしのこぼれる谷と岩のあいだを、わらじをふみしめてのぼりきると、ゆくての山と山とのあいだに、まっさおな宮津の海がみえた。城下の家なみも、城もひかっていた。ひと息いれて下りにかかる、たちまち海はかくれて、樹木の枝葉におおわれたほそい一本道になった。

ふもとまでくたると、夕ぐれのなかに宮津谷がひろがってきた。大手川は、この谷の小田村、喜多村、今福、薬師、宮村、滝馬などの人家や田畑をぬってながれ、城下にはいつて、宮津城の外堀にかわるのである。

あせまみれのからだを、松並木をふいてくる風にのせるようにして、まえかがみになった佐十の足どりは、京をでたところとすこしもかわっていなかった。

「――二ついな、さいたのは、ありやなんの花、二ついな、さいたのは藤の花よ。」

佐十のうたっている数え歌は、宮津地方の盆おどり歌へ花口くどきであった。しかし、佐十のへくどきはいいかげんで、「七ついな、さいたのは、南天の花よ」がさきになったり、「四つ、よ

めなの花」があとになったりした。これでは、踊り手が、まごついてしまふにきまつていた。

笠ひもを首^{くび}にかけ、足をひきずるようにしてあるいてる弁吉^{べんきち}は、川辺^{かわべ}郡田中村^{ごんぢんちゅうむら}をでてからというものは、まるでへおしへになったように、めったなことでは口をきかなかった。道^{みち}ばたの石地蔵^{いしじぞう}そっくりに日^ひやけた顔^{かお}は、つらい奉公^{ほうこう}のあかと、あせと、ほこりでよごれきつていたが、そのつら^{つら}がまえは、ひどくふてぶてしい。

「おい、弁吉^{べんきち}、たったの一年^{いっねん}で、お父^{とう}やお母^{かあ}の顔^{かお}がおがめるなんて、おまえはほんまに運^{うん}がええやっちやのう。ほんなら今夜^{こんや}は宮津城^{みやづじょう}下へおとまりあそばして、あしたにでも請^うけ人をよびだそうかい。それとも金引山^{かなひきやま}のイノシシ道^{みち}をつっぱして、まっすぐ奥山^{おくやま}へでもええんやで。わしもいろいろいそがしいけど、ここところは、おまえの氣^きのすむようにしてやるわ。」

飛脚^{ひまき}の佐十^{さじゅう}は、あるきながら、手ぬぐいで顔^{かお}や首^{くび}すじをぬぐった。薬師^{やくし}をすぎて、宮村^{みやむら}のはずれへかかると、道^{みち}ばたにやぶれ辻堂^{つじどう}があつた。そのうしろからふとい松^{まつ}の枝^{えだ}がのびだしている。土地^{とち}の人は、これをへ首^{くび}くくり松^{まつ}へといつて、女や子どもでなくても、日ぐれどきは、ひとりでに足^{あし}のはやくなるところであつた。

あるとき、重^{おも}い年貢^{ねんぎ}をおさめきれなかつた百姓^{ひやくしやう}が、そのために、むり算段^{さんだん}をしてくめんした錢^{ぜに}を、へばくちでまきあげられてしまつた。ふところにした錢^{ぜに}が、手あそびひとつで、倍^{ばい}にも三倍^{さんばい}にもふえるとさそわれ、ついふらふらと目がくらんだのである。百姓^{ひやくしやう}は、死人^{しにん}のようにまつさおになつて、村へもどるとちゆう、この松^{まつ}の枝^{えだ}へぶらさがつたという。

おなじような話の〈身なげ岩〉とか、〈子すて塚〉とかが、あっちこっちにあったが、これはなにも丹後宮津領内にかぎったことではなかった。

佐十は、足もとめずに、うしろへどなった。

「やい、弁吉、どうするつもりやねん。」

「わしは、奥山へはいきたくない。」

「よっしゃ、ほんなら今夜は城下どまりで、かけあいはいしたや。」

「わしは、宮津のお城下へもいかん。どこへもいかん。」

すると、くるとむきをかえた佐十が、おもいきりあごをしゃくってみせた。

「なんやて、小僧。われはこの佐十さまを、あめのようにしゃぶるつもりか。ふん、家へもどりとない、城下へもいきとない。——そしたら、その松の木へでもぶらさがる気か。あほたく

れもええかげんにせいよう。」

鼻うたのときとはうってかわって、笠をほうりだした手が、すばやく肩のふりわけ荷物へかかった。そのひじの下で、道中差しが鎌首をもたげたヘビのようにみえた。そっぽをむいて足をとめた弁吉は、それでも、せいっぱいの声でいった。

「わしはどこへもいかん。わしが奥山へもどされては、おとつあんもお母も生きておれん。それなのにわしが家へいねるか。」

「あほたれが！ そんな泣きごとが、いまさら腹のたしになるともおもうとるのか。」

いきなり佐十の右手がとび、小さな弁吉のからだがよろめいた。「べっ」とつばをはいて、佐十が、肩の荷をゆすりあげたときである。ころがるように弁吉が、佐十の大きな胸もとへとびこんでいった。奉公さきで、もみぬかれ、おとなあいての喧嘩の場数はふんでいる。下腹をけとばされた佐十が、「あつ」と声をだしてまごつくすきに、よこつとびにとんで、にげにかかったが、その足もとへ佐十の肩の荷がとんでからみついた。

「ちえっ、なまいきな寝しよんべんたれめが。」

おもいきり地べたへたたきつかった子どもの上へ佐十がとびかかった。——かみついたり、ひっかいたりして、じたばたする弁吉を、力まかせに草のなかへおさえつけ、「くそつたれめ！」とどなって、ひと息ついたときである。その佐十の小ぶとりのからだが、えりもとから、ちゅうぶらりんうきあがり、その下で手足をふりまわしていた弁吉も、これもまたつきとばされて、もういっぺん草の上へひっくりかえった。

「親子か、主従かはしらんが、ええかげんにせんかい。それとも、うぬは追いはぎか。そんなら、このままひくくって、わしが宮津の番所へつきだしてやってもええぞ。」

ふたりのあいだへわってはいった男は、佐十にむかって、まるで子どもでもしかるようにいった。この男はなかなかの力もちらしい。

「ええ、どこのだれやらしらんが、追いはぎとは、どの口でぬかしよった。この世の中には、いうてええことと、わるいことがあるわ。わしは京と宮津をまたにかけて、ちりめん飛脚をしとる金屋

佐十さじゅうというもんや。宮津みやづのちりめん問屋もんやや機屋衆はたやしゅうで、わしの名をしらんもんがおったら、そいつはもぐりやで。――はなせ。その手をはなさんかい。やい、小僧こそうをにがしでもしたら、うぬに証文しょうもんのかたをつけてもらうぞ。こらっ、はなせというたらはなさんかい。」

佐十さじゅうが、身みをもがいて、つかまれたえりもとをふりきり、目玉めだまをむきだしてにらみつけても、あいては、あんがいさっぱりした顔をしていた。

背せたけの大きい、色白いろしろの、まだ二十四、五のわかい男で、しかも総髪そうはつであった。このころ、武士ぶしから百姓ひやくしやう、町人ちやうじんまで、男は月代さかやきをそりあげていたが、この人はそうではない。ひたいのはえぎわから、そのままそっくり髪かみの毛をのばして、うしろでむすんでいる。こういう髪かみかたちのものは、たいてい医師いしか神官しんかんにきまっていた。

「なんだ、おぬしは飛脚ひきやくか。その飛脚ひきやくが、生糸きいとや、ちりめんの取り引きならともかく、街道かいどうのまんなかで、どうしてまた、子どもあいてに乱暴らんぼうをはたらくんかい。」

「あほくさい。なんべんおなじことをいわすつもりや。」

佐十さじゅうは、肩かたをそびやかしてみせた。それでも、ことばづかいはあらたまっていた。

「他人たにんの口だしするこっちゃないわい。それより、あんたはん、どこのお人やね。」

「わしか。わしは宮津みやづ大久保おおくぼの稻荷神社いなりじんじやの神主かんぬしで、坂根筑前守さかねちくぜんのかみというものだわ。用件ようけんがあつて、このさきの知り合あいをたずねてもどるところだが、その辻堂つじどうでひとやすみして、絵でもかこうとおもつとつたら、いきなり、とっくみあいがはじまったではないか。みてもおられんからでできたのよ。」



「ちえつ、このせちがらい世の中に、のんきなお人もあったもんや。大久保のお稲荷さんなら、どれほどご利益があつたかどうかはしらんが、わしもなんべんかお参りさしてもらつておりますで。それでな、追いはぎでない証拠をはつきりさせておかんと、けったくそわるいよつて、しゃべらしてもらいますがな。わしのこんどの宮津くだりは、商売のことだけやおまへん。摂州のさるお方から、できのわるい奉公人を、親もとへひきとってもらうようにと、たのまれましたんや。きょうのわしは、生糸や、ちりめん運びとはちがいませ。人運びのお使者ですねん。ほんで、その奉公人というのが、このにくたらしげな小僧や。」

「ほう、そんなことか。」

坂根筑前はわらいながら、おきあがつて笠をひろっている弁吉をながめた。

「追いはぎといったのはわるかったが、ちかごろ宮津ご領内はぶつそうでな。——それでこの小僧、奉公さきからひまをだされるほどでは、よくよく見こみのないやつらしいが、この近在のものか。」

「へえ、奥山の弥五兵衛とかいう百姓の小せがれですねん。まあ、手くせ、足くせのわるいぐらゐなら、ふんじばつて、二、三日、めしを食わせんといたら、たいていなおりましたるなあ。

——こいつめは、がきのくせに、手のつけられん強情もんやそうで、わしもくわしいことはしりません、朋輩衆に大けがをさせたそうですねん。むこうさんは、人のからだにきずをつけるようなもんは、やとつておけんといわはりましたな。——そら、そうです。人にきずをつければ、へたすると、子どもでも、手がうしろへまわりますさかい。へっへっ。まあ、あんさんもいま見やはった